

大人になってから読む児童文学 『マツの木の王子』

熊本県立大学

難波美和子

1. 大人も児童文学を

児童文学は子どもを楽しませるもので、「基本的には子どもの自我の欲求といえるものを物語的に充足させるものを持ち、それゆえに子どもに迎えられる」(谷本 58)ものである。だから、児童文学を大人になって読むときには、子どもの心に戻って読むのが正しいのかもしれない。だが、「そもそも児童文学は大人が子どもを意識して作ったものであり、そこには子どものあり方に対する作者の考えや時代の価値観が色濃く反映されている」(ガイド3)ものでもあるように、子どもの心に戻るとは結局のところ、大人が考える子どものあり方へのこだわりを露わにするだけかもしれない。それならば、むしろ、子どもの視点を取り戻そうとする必要はない。子どものころに読んだ本を読み返すだけではない。児童文学だからといって、子供にしか面白くないわけではない。大人が遠慮することはない。大人だからこそ味わえる児童文学の面白さというものがあるはずだ。これまで読む機会がなかった古典でも、新しい良書でもいい。若者とは言えなくなった年齢の大人にこそ読んでほしい児童文学作品がある。

2. 「新しい世界の童話シリーズ」

その中から取り上げたいのが、『マツの木の王子』である。1960年代後半から、学習研究社は翻訳児童文学を「学研版 新しい世界の童話シリーズ」と名付けて次々出版している。一時期には小学校低学年から高学年までの読書力に対応した36冊セットにしていた。その中には優れた作品が多数含まれているが、残念ながら一部を除いては絶版となっている。版を重ねているものには、『スプーンおばさんのぼうけん』のシリーズがある。このシリーズに含まれている作品は英語圏が中心だが、ドイツや北欧、東欧や南欧の作品もある。アジア作品がないのは、編集委員がヨーロッパ系の文学専攻者ばかりだったからだろう。特徴としては、ファンタジー色の強い作品が多いことである。1950年代以降の作品がほとんどだが、中にはケネス・グレアムの『おひとよしのりゅう』(1898)も入っている。『マツの木の王子』はその中で「読書力のついたお子様のために」というレベルに入っている一冊である。

3. 『マツの木の王子』の物語

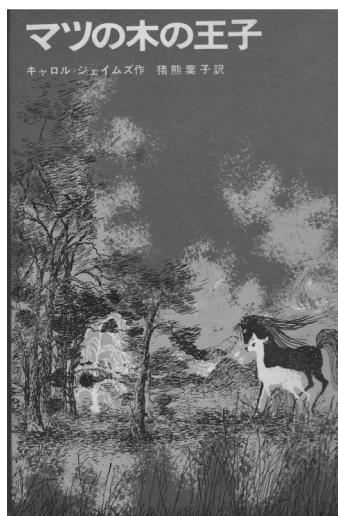
『マツの木の王子』は美しく、不思議な物語だ。愛の物語であり、死の物語でもある。この本は、私にとって気になる本の一冊である。それは物語の内容のためというよりも、場面のあちこちで生みだされるイメージのせいだったのではないか。深く大きな森、マツの木のそばに生えるシラカバの木、木から彫り出される本ものそっくりな動物と、満月の夜にダンスする木彫りの動物たち、メリーゴーラウンド、揺り木馬、など。特にシラカバは優美でロマンティックなイメージをかもし出す。物語は、困難に立ち向かう恋人たちの物語ではあるのだが、何しろ自分たちでは動けない木が主人公なので、わくわくする冒険と言うわけにはいかない。危機に対して積極的に行動するのは、たった一度しかない。恩人を助けるために犠牲になることを申し出る時だ。ふたり（二本）が離れ離れになってしまうことはない。改めて読むと、障害を乗り越え愛を成就する物語と言うよりも、いろいろあった後に静かな、避けることのできない死へと向かう穏やかな人生の物語と見えてくるのである

だれでも知っている、という本ではないので、物語を少し詳しく、結末まで紹介しておこう。

* * *

むかしむかし、遠い山の向こうに大きな森があり、その奥には最も高貴な木であるマツだけが生えているマツの王国があった。ところがある時、王国の中心の王の土地の一角、マツの王子のとなりに、シラカバの木が生えてきた。マツたちは怒るがどうしようもなくシラカバは成長し、やがてマツの王子はシラカバを愛するようになった。シラカバを愛している、という王子の宣言を聞いたマツたちは憤慨し、林の外から木こり呼び寄せ、シラカバを切り倒させた。愛する木が切り倒されたのを見て、マツの王子も地面に倒れてしまった。マツたちは後悔したが、木こりはシラカバとマツをとともに林から運び出し、遠い町の材木屋に売ってしまった。

材木屋で長い時間を過ごした若いマツとシラカバを買ったのは、貧しい木彫師だった。彼の作業場にはさまざまな木彫りの動物たちがいた。木彫師は木彫りの動物たちを愛したので、彼らを売ることができずに貧しく暮らしていた。そして、動物たちは毎月、満月の夜には命を与えられて歌い踊ることができた。それは、木彫師が昔、病気のジプシーに親切にしたお礼に与えられた魔法によるものだった。木彫職人はマツを黒いウマに、シラカバを銀色の雌シカに作り上げ、自分の生涯で最も美し



い作品だと満足する。マツとシラカバもふたりと一緒にいられること、月に一度踊ったり歌ったりする生活を楽しみ、幸せだった。

だが、ある時、何日も木彫師が作業場を訪れなかった。折からの満月に、動物たちは木彫師の家に行き、彼が病気で倒れているのを知る。しかし、彼には医者にかかる金がなかった。そこで、最も美しい彫刻であるウマとシカが売られることを申し出、値札をつけて門に立つ。夜が明けると、家の前をサーカスの一団が通り掛かった。団長は美しいウマとシカを見るとメリーゴーラウンドの乗り物用に買うことにする。お金が郵便受けに入れられるのをみて、ふたりは安心して、サーカスに加えられた。だが木彫師の家を出たふたりには魔法はもう及ばない。

メリーゴーラウンドの仕事は楽しかったが、彼らの位置は反対側に固定され、移動の時に馬車に積み込まれる以外は一緒にいることができなかった。そのことをふたりはとても悲しみ、やがて具合が悪くなってしまう。メリーゴーラウンドからはずされたウマとシカは廃棄物業者に渡され、ゴミ置き場に捨てられた。ところが、メリーゴーラウンドのウマとシカを愛していた子どもたちが彼らを捜し出し、一緒にいられるように自分たちが遊ぶ公園に運んだ。そこで彼らは揺り木馬に改造され、子どもたちと遊びながら静かな日々を過ごす。やがて子どもたちも成長して訪れなくなり、ウマとシカはふたりで静かに幸せな歳月を過ごした。やがて塗装も剥がれ、ただの木のかたまりのようになって行いった。ともに故郷の森を懐かしむようになった秋の終りのある日、ふたりの意を汲んだように公園の庭師が落ち葉の大きな山を作り、その上に二人を乗せて火をつけた。ふたりは煙となって森に帰って行き、林の中に消えて行った。

* * *

4. 排他性と思いやり

『マツの木の王子』の作者はキャロル・ジェームズ、訳者は猪熊葉子である¹。原題は *The Pine Prince and the Silver Birch* で、直訳すると『マツの王子とシラカンバ』ということになる²。原書出版は1964年。訳書は1967年出版で、挿絵は原書のセヴィン・ウネルのものがそのまま使われている。

ジェームズについては、残念ながら猪熊による紹介以上の情報がない³。猪熊によると、ジェームズは1935年ロンドン生まれ。パリに留学後、ロンドンで働き、『マツの木の王子』出版のころはウェールズに住んでいた。

猪熊は、マツの王国の排他性は、「どこかイギリスの社会にいまだに厳然と残存している階級意識を風刺している」（猪熊,167）と言い、「二本の木は愛をつらぬき、その愛と犠牲の精神が、周囲のものにしあわせをもたらします。」（猪熊168）と排他的態度の愚かしさや思いやりの大切さを読者に無理なく受け入れさせるがこの物語

の優れた点であることを示唆している。

排他性と思いやりは物語の中で対比され、繰り返される。マツの王国の住民たちがシラカバの存在を許さず、そのためにマツの王子とシラカバは切り倒される。マツたちの排他性はまさに身分制度や人種的な排他主義を思わせる。単一性を重んじるマツの王国の排他性に対し、材木屋で出会う様々な木材たちは、それぞれの資質に誇りを持っているが、他者を見下すことはしない。彼らは自分たちが成り得るものに喜びを持って向かっていく。リンゴの木は、「わたしは、たきぎように売られるかもしれないけれど、ちっとも気にしてはいない。わたしがもえるときは、とてもあまい、いいにおいがするから、わたしはみんなをしあわせにできるもの」(ジェイムズ、32)と言って、たとえ燃やされてしまうとしても、意味がある、と将来に不安と期待をもつ若い二人に教える。

次にふたりが出会う木彫師のつくる動物たちは、姿かたちがなんであろうと、仲間として無条件で受け入れ、互いを思いやる。それは、木彫師が動物たちの喜びを理解していることに由来する。しかし、彼らにとって小屋の外の世界は何があるかわからない、恐ろしい場所でもある。だから彼らは仲間で寄り添って、外部に背を向ける。マツの王子とシラカバだけが外の世界に興味を示す。一方、木彫師の動物たちとは違い、メリーゴーラウンドの動物たちは最初、口をきこうともしない。王子のあいさつに、めんどりは「わたしは知らないひととは口をききません」(ジェイムズ 114)と答える。その理由は、ほかのめんどりとだけしか話さないからである。一種一体ずつしかいないのに。他の動物たちも同様で、長く一緒にいるにも関わらず、お互い口もきかない。メリーゴーラウンドに乗る子どもたちにも関心はなく、みな孤独である。マツの王子とシラカバは、彼らが互いに話をし、思いやるようにと導く。このことによって彼らは幸せになった。排他的な狭量さは不幸だが、克服され、互いが理解をすることで彼らは幸せになる。

『マツの木の王子』は自分たちとは異なったものを排除する態度を批判し、それぞれの個性を認め、互いに思いやりながら生きて行こうとする物語だ。マツの林は変わらず単一的であり、木彫師の小屋はいつまで楽しい満月を過ごすことができるかはわからないが、マツとシラカバの周囲では、相互理解が幸せをもたらす。

しかし、周囲を幸せにしていくとしても、マツの王子とシラカバはお互い以外に意味を見出すことができないでいる。互いにメリーゴーラウンドの反対側にいることに耐えきれずに不具合を起こし、廃棄されてしまう。ゴミ捨て場に捨てられることでさえ、ふたりには一緒にいられるだけましだという。それは、孤立した状況を楽天的な見方に代える言いなしであろうが、このままであればふたりの結びつきは他者を排除するものになってしまっただろう。

彼らは子どもたちに救われ、公園で揺り木馬として子どもたちの遊び相手として静かな余生を送る。この公園は管理人の庭師以外の大人は入れない子どもたちだけのものだ。しかも町の中心に近く、周囲の建物が大きくきれいだと述べられていることから、かれらは都市の中産階級の子どもたちだとわかる。豊かな中産階級が外部を排除する制度がふたりの余生を可能にする。それでも閉じられた庭に守られて過ごすふたりの姿は、社会の理不尽さを受け入れて静かに耐え、やがて平穏な暮らしを手に入れて満ち足りた人生の終わり迎えるという安堵のようなものがある。煙となって故郷のマツの林にもどっていくという最後の場面は、抒情的で美しい。

『マツの木の王子』に描かれた擬人化された樹木の恋人たちの静かな生の終わりは、年齢を感じる齢になったときに（もう）一度読んだ時に味わい深く感じられるだろう⁴。

注

1. 猪熊葉子はローズマリー・サトクリフやフィリップ・ピアスの作品を多数翻訳している。『床下の小人たち』の最終巻『小人たちの新しい家』も猪熊の訳で読むことができる。
2. ここでは、翻訳に従い、「シラカバ」とする。Silver Birch は日本のシラカンバと近縁種で、和名はオウシュウシラカンバで、枝が垂れるのでシダレカンバともいう。シラカバの少女が恥ずかしそうに枝を揺らす様は、シダレカンバの姿を想像するとよくわかる。
3. キャロル・ジェイムズはイギリスの人名事典類に情報を見つけることができなかった。British Library Catalogue でも The Pine Prince and the Silver Birch しか所蔵されていない作家である。今回入手できた情報は猪熊による記述に限られる。猪熊訳『マツの木の王子』「解説 原作者キャロル＝ジェイムズについて—おかあさま方へ—」(166-168)による。
4. 学研では絶版。1999年にフェリシモからオンデマンドで再版されたが現在は品切れ。所蔵図書館を探してみしてほしい。原書の英語はやさしいので、英語で読んでみてもいいかもしれない。ジェイムズの英語は、同意語の繰り返ししが効果的に使われて、リズムがよい。ただし、イギリスもアメリカも絶版。品切れの本を捜してみることも面白いのでは？

参考文献

James, Carol, *The Pine Prince and the Silver Birch*, Illustrated by Sevin Unel, London: Andre Deutsch, 1964.

子どもの本・翻訳の歩み研究会編『図説 子どもの本・翻訳の歩み事典』 柏書房、2002.

ジェイムズ、キャロル 『マツの木の王子』 猪熊葉子 訳、学習研究社、1967.

谷本誠剛『児童文学とは何か 物語の成立と展開』 中教出版、1990.

日本イギリス児童文学学会編『英米児童文学ガイド 作品と理論』 研究社、2001〔ガイド〕

